筑波大学審査学位論文（博士）

論文題目

書くことの指導における相手意識の表出と言語的調整

人間総合科学研究科学校教育学専攻
森田　香緒里

１．研究の目的と方法

本研究の目的は、文章表現において学習者の相手意識がどのように表出され、またどのように発達するかについて、言語的調整という概念を用いて明らかにすることである。これまでの作文教育論における「相手意識」は、学習者の自己表出としての書くことと、表現技術習得のための書くこととの二元的な目標を接続させうる重要な概念として論じられてきた。そして多くの作文指導実践では、「相手意識を持たせる」ことを目的として様々な具体的な相手を設定し、その有効性を指摘している。しかし学習者が実際に自らの相手意識をどのように文章表現に表出させているのか、その実態を明らかにした研究はほとんどない。そこで本研究では小学生から高校生を対象に作文調査を行い、言語的調整という概念で分析することで相手意識を学習者の選択行為とみなし、その実態と発達について追究する。そして相手意識の表出を言語的調整というコミュニケーション行為としてとらえ、多言語多文化社会に向けた国語教育という文脈を視野に入れながら、作文指導にどう活用するかについて考察する。

これらの目的の達成のために、本研究では以下の手順と方法をとる。

⑴相手意識と文章表現との関係についての関連諸学問領域の先行研究を検討する。

相手意識と文章表現との関係、および相手に応じて言語表現を調整する行為（言語的調整）については、複数の学問領域で議論されている。本研究では、国語教育学、修辞学、認知心理学、社会言語学、日本語教育学の領域におけるこれらの研究状況を概観する。先行研究の検討を通して、児童生徒の相手意識と文章表現との関係がどのように議論されてきたのかを把握し、本研究の独自性と意義について論じる。

⑵相手意識を作文指導においてどのような概念として扱い、学習活動としてどのように顕在化させるかという問題について検討する。

英国における「言語意識教育」（Language Awareness Approach）に着目し、その理論および実践について検討する。言語意識教育は、1970～1980 年代の英国において、多言語多文化社会に対応した新しい国語教育の内容・方法を提案するものとして発展した。学習者が母語使用者として既に有している言語についての潜在的な諸知識や感受性などを、教室の中で顕在化させるアプローチをとっているのが特徴である。学習者の既有の言語的調整の力を、作文指導においてどのように顕在化させ活用できるのか。言語意識教育に関する先行研究や教材および学習活動を検討することで、その理論的基盤や方法、課題についての示唆を得る。

⑶小学生・中学生・高校生を対象とした作文調査を行い、相手意識の表出と発達について分析する。

学習者の相手意識を作文指導において活用するためには、⑵での理論的検討をふまえつつ、学習者がどのような言語的調整を行うかについての実態をとらえること、そしてその実態を発達的な観点でとらえることが必要になってくる。そのための調査法として、本研

究では「書き分け課題」という作文課題を設定した。これは、一人の学習者が異なる複数の相手に向けて同じ内容の作文を書き分けるという作文課題である。対象は小学校低中高学年・中学生・高校生を対象とし、それぞれの相手意識の表出の仕方について発達的な観点から分析を行う。

⑷⑶で実施した作文調査を英国でも実施し、相手意識の表出と発達について国際比較の観点から分析する。

⑵で英国の「言語意識学習」を手がかりに相手意識の表出と活用の方法についての理論的検討を行うわけだが、そこでの意義のみならず課題を克服し日本で援用するためには、日本人児童特有の言語的調整に対応する必要がある。⑶で得られた成果を検証するため英国人児童（初等学校生）を対象に作文調査を行い、⑶で実施した日本人児童（小学生）対象の作文調査と比較しながら分析を行う。⑶で指摘した日本人児童の相手意識の表出と発達の特性を、⑷で国際比較によって検証するという試みである。⑵で参照した英国との間で国際比較を行うことによって、日本人児童の文章表現の特性をとらえることを試みる。

２．論文の構成

序章
第１章　文章表現における相手意識の所在
　第１節　書き手と読み手との関係―海外の作文研究における議論
　第２節　作文指導と相手意識―国語教育学における議論
　第３節　対人関係と言語的調整―日本語教育学・社会言語学における議論
　第４節　文章産出過程における「読み手」―認知心理学における議論
　第５節　本研究の位置づけと独自性
第２章　作文指導における相手意識の顕在化の問題
　第１節　多言語多文化社会・英国における「言語意識教育」の成立背景
　第２節　言語意識教育の指導原理
　第３節　言語意識教育における教材と方法の特徴
　第４節　相手意識の顕在化の意義と課題
第３章　学習者の文章表現における相手意識と言語的調整
　第１節　小学生の文章表現における相手意識
　第２節　小学生の相手意識とメタ認知
　第３節　中学生・高校生の文章表現における相手意識
　第４節　相手意識の表出の特徴と発達過程
第４章　相手意識の表出に関する国際比較分析
　第１節　低学年児童作文の国際比較

第２節　高学年児童作文の国際比較
第３節　国際比較分析からみる相手意識の発達過程
終章

３．論文の概要

序章では、問題の所在と本研究の目的や方法などについて述べた。

第１章では、国語教育学および関連諸学問領域を対象に、相手意識と文章表現との関係がどのように論じられてきたかについて検討した。その結果、どの学問領域においても、インプット（相手の属性や状況の設定）とアウトプット（産出された文章）との関係が主な論点となっており、その間をつなぐ問題、すなわちなぜそのような文章が産出されたのかという児童生徒の言語選択意識については射程に入っていないことを指摘した。このような研究状況に対し、「相手に応じたものを書こう」と学習者が意識した時、どのような言語選択と結びつくのかという、学習者側の「適切さ」の判断や言語選択の事実が問題にされるべきだと論じた。

第２章では、英国における「言語意識教育」の理論的検討を行った。言語意識教育では、言語変異という言語機能論の枠組みを援用した三つのレベルでの言語的多様性を学習者に認識させることを目的としていた。さらに、個人の言語使用の中においても言語的多様性は内在し発生するものであると位置づけている点、そして相手や状況に応じた様々な言語的調整を学習活動の起点としている点に着目した。言語意識教育の理論的検討によりこのような示唆を得て、言語的調整の結果のみならずその調整過程自体を意識させるような学習活動が作文指導に取り入れられるべきであると論じた。

第３章では、小学生・中学生・高校生を対象に書き分け課題を設定して、相手意識の表出に関する作文調査を行った。作文データを言語的調整という概念に基づいて分析した結果、表現形式面での言語的調整については、表記レベルから語や文のレベル、そして文章構成のレベルへと、学年が上がるにつれて徐々に言語的調整の範囲が拡大していくことがわかった。そして内容構成面については、書きたいことを優先して選択する行為から、徐々に相手に必要な情報が選択されるようになり、文種や目的達成に必要な構成が意識されるようになることがわかった。どの段階においても、相手に応じた言語選択を学習者は自らの母語知識に基づいて行っており、多様で豊かな言語的調整が見られた。

第４章においては、日本人児童の相手意識の表出の特徴がどの程度日本人特有のものであるかについて検討するため、小学校低学年・高学年児童を対象とした書き分け課題の調査を日英２ヵ国で行った。日英児童作文の国際比較分析から、日本人児童は学年が上がるにつれて、相手を意識した場合の配慮を英国人児童よりも多様な形で表出することが明らかになった。書くことのコミュニケーションにおいて、日本人児童は低学年から相手意識

を発動させており、表記や話題管理を中心とした配慮から、徐々に様々な側面での配慮へと相手意識の表出の仕方を増大させていく、ということがわかった。第３章で明らかにした言語的調整の多様性や豊かさは、日本人児童特有のものであった。

終章では､研究成果のまとめと意義などについて述べた｡児童生徒の相手意識の表出は、小学校低学年という早期から行われ、また発達段階にともない多様な言語的調整のレベルで行われていること、そしてその多様性や豊かさは日本人児童に特徴的に表出されると結論づけた。研究成果の意義としては、作文指導における「相手」の設定に対し、学習者の相手意識の発達に基づいた根拠を提示したことがあげられる。また、本研究でとりあげた言語的調整の力は、今後の多言語多文化社会において求められるコミュニケーションの力であり、書くことの学習においては言語的調整の過程の共有が重要になると論じた。

４．主要参考文献

Berkenkotter, C. (1981) Understanding a writer’s awareness of audience. *College Composition and Communication*, 32, pp.388-399.

Carvalho, J.B. (2002) Developing audience awareness in writing. *Journal of Research in Reading*. 25, pp.271-282.

Clark, I. L.(2003) *Concepts in Composition：Theory and Practice in the Teaching of Writing.* Lawrence Erlbaum Associates., pp.141-142.

Hawkins, E. (1984) *Awareness of Language：An Introduction*. Cambridge Univ. Press.

Kirch, G & Roen, D. (1999) *A Sense of Audience in Written Communication*. SAGE Publications.

Nystrand, M. (1986) *The Structure of Written Communication.* Academic Press.

内田伸子 (1990)『子どもの文章』東京大学出版会

倉澤栄吉 (1988)『倉澤栄吉国語教育全集５　過程重視の表現指導』角川書店

佐渡島紗織 (2002)「子どもの作文にみる相手意識 -小学生へのインタビューによる調査-」全国大学国語教育学会『国語科教育』第 50 集、pp.50-57.

鄭恵允 (2002)「『接触場面』における日本語母語話者の言語的調整に関する一考察―『フォリナー・ライティング』の概念形成に向けて―」『桜花学園大学研究紀要』第４号、pp.257-265.

渡辺雅子 (2004)『納得の構造―日米初等教育に見る思考表現のスタイル―』東洋館出版